

Whooops!

Vol.13 2016 SUMMER

多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ発行



PHOTOGRAPH

多摩美学内で作品を発掘

Special Interview

荻原規子 (小説家)

Whooops! 見聞記

三宅一生の神髄に触れる
山種美術館日本画アワード
伊藤若沖の巧みを知る

街角アートスクランブル [欧州篇]

Whooops! アーカイヴ

個性豊かな雛人形が東北地方から勢揃い

Whooops! 考

エジプト人にとって文字は新しいメディアだった

あっ!の展覧会

『シリアルキラー』展

面白まんが

Whooops!

Contents

3 PHOTOGRAPH

多摩美学内で作品を発掘

4 Special Interview

荻原規子（小説家）／古代の人々と同じように古事記を読む

6 Whooops! 見聞記

三宅一生の神髄に触れる

山種美術館日本画アワード発進 予定外の賞も

輪郭線を描かなかった伊藤若冲の巧みを知る

10 街角アートスクランブル [欧州篇]

12 Whooops! アーカイヴ

個性豊かな雛人形が東北地方から勢揃い

14 Whooops! 考

エジプト人にとって文字は新しいメディアだった

16 あっ！の展覧会

その男、凶悪につき／『シリアルキラー』展

18 面白まんが

Whooops![ウープス] 2016 SUMMER Vol.13

発行日 = 2016年7月14日

編集長 = 小川敦生 (多摩美術大学芸術学科教授)

編集 = 小林真弓、ド・ソルヒ、笛木一平、増田啓志、横山亮、椋田大揮

誌面デザイン = ド・ソルヒ、増田啓志、横山亮、椋田大揮、小川敦生

表紙・目次レイアウト = 竹内穂希

表紙写真 = ちょうど100年前の1916年にダダイズムが始まったと伝えられる、スイス・チューリヒのキャバレー・ヴォルテール…P.10 参照

発行 = 多摩美術大学芸術学科フィールドワーク設計ゼミ

〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723

印刷 = 株式会社ハシモトコーポレーション

問い合わせ先 = aogawageige77@yahoo.co.jp

Twitter @aogawageige77

Webzine「タマガ」 = QRコード

●掲載記事、写真の無断転載を禁じます。



Whooops! について

本誌を手にとっていただき、ありがとうございます。誌名『Whooops!』は、「あっ！」という驚きを表しています。あなたの中で何かが弾けてほしい、刺激的な日々を送ってほしい。

そんな思いを込めて制作しました。お読みいただく小さな「あっ！」が生まれてくれますように！



シリア・パルミラ遺跡の奉納碑文（2世紀）。豊穡の女神アラートに一族の繁栄と平和を願って捧げられた石碑…P.14 参照



東京・上野の街角の柱にあしらわれていた『生誕300年記念若冲展』の広告。会期中に約44万人を動員したという…P.8 参照

PHOTOGRAPH



工芸学科1年生が授業で紙のみを使用して制作した《ミロのヴィーナス》石膏像頭部の模刻作品を、TAMABI select企画室がギャラリー空間に展示した
Photo by Yui Kimura

多摩美学内で作品を発掘

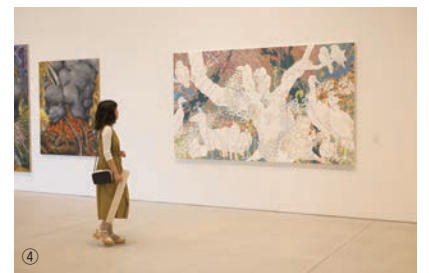
5月下旬に本学八王子キャンパスのアートテーク・ギャラリーで『TAMABI select -1-』展が開かれた。企画をしたのは本学芸術学科構想計画設計ゼミと展覧会設計ゼミの学生たちだった。彼らは学内の制作現場を歩いて回ったり、独自のネットワークで情報を収集したりするなどして、今にも産声を上げそうなクリエイターの卵の作品を多数発掘し、この展覧会に臨んだそうだ。



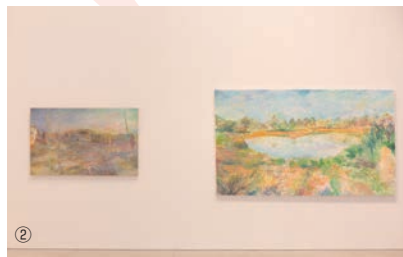
表面の毛の部分は砂紙でできているという。大学院博士前期課程彫刻専攻2年、JIN LONGの作品
Photo by Yui Kimura



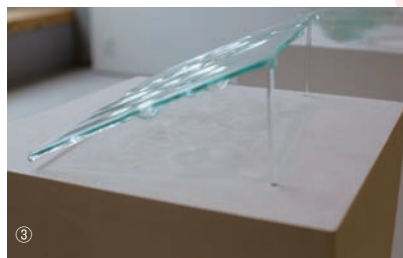
①



④



②



③

『TAMABI select -1-』展 (2016年5月23～30日、多摩美術大学八王子キャンパス アートテーク・ギャラリー)

出品作家：飯島暉子、近藤拓丸、坂本千彰、佐藤瑠美、清水葵、須藤晋平、田辺希、長尾郁明、増尾遥、吉村亜希子、JIN LONG、SONG YEONJOO、工芸学科1年(工芸制作研究Ⅰ「基礎造形」)企画：TAMABI select 企画室＝構想計画設計ゼミ(担当：海老塚耕一本学教授)＋展覧会設計ゼミ(担当：家村珠代本学教授)の学生たち

取材・文・撮影＝編集部
レイアウト＝ド・ソルビ

①大学院博士前期課程デザイン専攻情報デザイン研究領域1年、坂本千彰の作品。椅子に座ると、透明なピラミッドの中で1/2サイズのその人の像が立体的に再現される ②絵画学科油画専攻4年、吉村亜希子の作品 ③工芸学科ガラス専攻4年、田辺希の作品。ガラス器そのものではなく、影の美しさを見せる ④絵画学科日本画専攻2年、増尾遥の作品(右)、大学院博士前期課程絵画専攻油画研究領域2年、須藤晋平の作品
Photo by Yui Kimura

SPECIAL INTERVIEW

荻原規子 (小説家)

古代の人々と同じように古事記を読む

『日本の神話 古事記えほん【一】 国生みのはなし ～イザナキとイザナミ～』が4月に刊行された。イザナキとイザナミの国づくりや黄泉の国での冒険を、現代の絵本はどのように伝えているのか。本文を執筆した、小説家の荻原規子さんに話を聞いた。



荻原規子さんのインタビュー風景 (*)

人間がこの世に姿を現すずっと前、この大地と国はどんなふう生まれ、どのように成長したのか。「古事記」はそんな「国の成り立ち」の物語を伝える。その『古事記』が絵本という形で新しく生まれ変わった。「日本の神話 古事記えほん」シリーズだ。本文を執筆した荻原規子さんは、日本の神話を題材にした『空色勾玉 (そらいろまがたま)』などのファンタジー小説の作者として知られる。今年4月に刊行された第一巻『国生みのはなし』は、まだ「水にういたあぶらのようで、クラゲのように海にただようばかり」だった「地上」を、イザナキとイザナミという二人の神が固めて、国づくりを始める。

二人は島を作って地上に降り、結婚をして、国土やたくさんの

神々を生み落とす。しかし、最後に火の神カグツチを産んだ時、イザナミは火傷を負って死んでしまう。イザナミを失ったイザナキは悲しみと怒りのあまりカグツチの首を切り落としてしまう…。何と恐ろしく、悲しい話なのだろうか。だが、荻原さんはもともと、異なる読み方をしていた。

「小学生の時にこのくだりを本で読んで、不思議なことにあまり恐ろしさや残酷さを感じなかった。切り落としてしまったカグツチの首からも、飛び散った血からさえも神々が生まれ変わったかのようにたくさん生まれたということが書かれていたからだと思います」荻原さんはこの絵本の本文を書くに当たって、子どもたちがまず

は絵で内容を読み取ることができるように、斎藤隆夫さんの挿画を邪魔しない文章作りを心がける。そのためには元の古事記の内容から削らなければならなかった部分もあったという。逆に絶対にはずせないと感じるくだりもあったそうだ。例えば、黄泉 (よみ) の国から地上へ戻ってきたイザナキが川で黄泉の国の汚れを清めるために、身につけていたものを全て脱ぎ捨て、その脱ぎ捨てられた衣装からも神々がうまれる場面。ここではイザナキが身につけていた腕輪や冠、手に携えていた杖などが細かく書かれているのだが、荻原さんはこれらのものをちゃんと物語に登場させたいと考える。こうした細かな描写を読んで初めて、神様が装身具を身につけていることが分かるからだ。

「そうした細かいところが分かるのが、子どもはうれしいんですよ」と荻原さんは目を細める。

元の古事記には、登場する神々の動きやものの名前、音などがとても具体的に書かれている部分がある。一方で、とてもあいまいに表現されている部分もある。この絵本の冒頭でイザナキが「天の沼矛 (あめのぬぼこ)」で海をかき混ぜる場面がまさにそのひとつ。イザナキとイザナミが立っている天の浮橋やイザナキが持つ天の沼矛がどのようなものだったかはわからないのだ。想像のヒントになるのが、矛で海をかき混ぜた時の「コオロコオロ」という聞きなれない音の記述である。古事記はもともと人々が口から口へと語り伝えてきた説話を集めて文字に書き起こし



『日本の神話 古事記えほん【一】国生みののはなし ～イザナキとイザナミ～』より。天の浮橋に立って天の沼矛で海をかきまぜずイザナキと、見守るイザナミ

『日本の神話 古事記えほん【一】国生みののはなし ～イザナキとイザナミ～』より。黄泉の女ヨモツシコメから逃げるスサノオが、頭に巻いていたつる草を投げると、あっという間に山ぶどうがたわわに実るしげみになった



たものだ。古事記成立以前の古代の人々は、「コオロコオロ」という音から、イザナキが天の浮橋に立って天の沼矛で海をかき回している情景を思い浮かべていたのだろう。その情景は、音とともに人々の記憶に残ったに違いない。この絵本にも「コオロコオロ」という音の記述がある。「こうした言葉や表現をできるだけ残したかった」と荻原さんは言う。

この絵本は、特に、声に出して読むことをおすすめしたい。イザナキが矛で海をかき混ぜる様子や、イザナミが死んでしまった時のイザナキの怒り、黄泉の軍勢から逃げるイザナキのドキドキなどを、体全体で感じることができるはずだ。口から口へと説話を語り継いでいた古代の人々のように。

(おざわら・のりこ) 東京都出身。『風神秘抄』(徳間書店)で第55回小学館児童出版文化賞など多数の賞を受賞。『空色勾玉』『白鳥異伝』『薄紅天女』(徳間書店)『西の善き魔女』シリーズ(中公文庫、角川文庫)など著書多数。



取材・文・レイアウト=増田啓志
撮影=渡邊裕人(*)

Whoops! 見聞記

三宅一生の神髄に触れる

衣服デザイン界の巨人、三宅一生。デザイナーとして名前は知っていても、仕事の全容を見たという人はそうはいないだろう。この春、東京・六本木の国立新美術館で開かれた『MIYAKE ISSEY 展：三宅一生の仕事』は、三宅の仕事を見渡することができる貴重な場を形成している。プリーツの服制作の実演や衣服を扱えるコーナーもあり、神髄に触れることができた。



①

『MIYAKE ISSEY 展：三宅一生の仕事』(終了しました)

2016年3月16日～6月13日、
国立新美術館(東京・六本木)

①セクションBの展示風景。日本の編笠がこれほどファッションブルになるとは驚きだ

②セクションCの展示風景。世界の国旗をあしらったプリーツが並ぶ様は壮観だ

③プリーツマシンに入れる前のプリーツの服。1枚の布から作り出されるところが興味深い

④セクションAの展示風景。「タトゥ」の作品は存在感が大きい

(国立新美術館「MIYAKE ISSEY 展：三宅一生の仕事」展示風景 撮影：吉村昌也=写真4点とも)



②



③

展覧会は3つのセクションに分かれていた。セクションAは1970年代の作品。いきなり、「タトゥ」の作品が強烈な印象を放っている。日本のタトゥ=刺青は、アートの観点で論じると一つの揺るぎない世界を作っており、近年は海外でも注目されている。三宅のタトゥは、そんな伝統文化にいち早く目をつけ、衣服デザインの世界に解き放った表現だったのではないか。ポップに描かれた男女の顔の背後のくるくるとした模様が、タトゥの趣を醸し出している。これを着て街を歩けば、本物の刺青以上に注目をあびるだろう。

このセクションでは、長い通路に沿って作品が飾られている。そ

れがファッションショーをほうふつとさせる。歩くだけで楽しい。ハンカチーフ・ドレス、コクーン・コートなどの往年の名作も並んでいる。ガラスケースに入っていないため、思わず触ってしまいそうになる。

セクションBは80年にスタートした「ボディ」シリーズの展示。このシリーズで三宅は、「服は着るための道具」という従来の常識を覆したのではないか。たとえば、日本の編笠や袴のような衣装をスケルトンで表現した作品。これらを「服として着られるか」と問われれば、大多数の答えは「No」だろう。それでいいのだ。大量生産・合理至上主義で白シャツにプ

リントされた文字だけを変える粗悪品が氾濫していた当時のファッション業界に、三宅は警鐘を鳴らそうとしていた…そんな思いさえ感じさせる吹き飛んだデザインだった。

セクションCは大空間になっており、まるで舞踏会のような光景を作り出していた。もちろん服を着ているのはマネキンだが、一体一体に、いまにも動き出しそうな活力を感じたのだ。「素材」「プリーツ」「IKKO TANAKA ISSEY MIYAKE」「A-POC」「132 5. ISSEY MIYAKE」と「陰翳 IN-EI ISSEY MIYAKE」という5つのテーマの展示エリアの間には壁や順路を示す矢印はなく、観

覧者は自由に行き来できる。

まるで紙工芸のような趣を持つ「プリーツ」を生み出すプリーツマシンの実演の場では、三宅の服づくりの神髄に触れることになるだろう。会場の一角では、1/2サイズのトルソーに「132 5. ISSEY MIYAKE」の1/2サイズの服を着せる体験もでき、三宅のデザインを観覧者は体感できるのだ。目から入ってくる情報だけでは、質感もわからなければ、衣服がどれくらい人間になじんでいるといったことを想像するのも難しいだろう。展覧会のあり方についても考えさせられた。

取材・文=笹木一平
レイアウト=ド・ソルヒ



Whoops! 見聞記

山種美術館日本画アワード発進 予定外の賞も

館の移転などの事情から20年近くの間、開催されていなかった「山種美術館賞展」。その趣旨を継承した公募展「Seed 山種美術館 日本画アワード」がこの春始まった。京都絵美（みやこ・えみ）の《ゆめうつつ》が大賞を受賞した。



『開館50周年記念特別展 Seed 山種美術館 日本画アワード2016 - 未来をにう 日本画新世代 -』(展示は終了しました)

2016年5月31日～6月26日、山種美術館(東京・恵比寿)

大賞:京都絵美《ゆめうつつ》
優秀賞:長谷川雅也《唯》
特別賞(セイコー賞):狩俣公介《勢焔》
審査員奨励賞:外山諒《Living Pillar》

審査員:竹内浩一、佐藤道信、松村公嗣、宮廻正明、安村敏信、山下裕二、山崎妙子

会場風景。左から長谷川雅也《唯》、京都絵美《ゆめうつつ》、狩俣公介《勢焔》

意識の闇を描いたような世界に、眠ろうとしている女性が浮遊しているように見える。白と黒が基調の衣服はくっきり描かれているのに、手や足の表現はおぼろげで、闇の中に沈みかけている。「横たわる女性に夜空のイメージを重ねました」と、画家自身が書いたと思しき解説文にある。だが、女性がまどろみかけていることを考えれば、夜空を人間の深層意識になぞらえても、あながち的外な想像とはいえないだろう。

この作品、技法と画題の親和性は高い。夜空あるいは意識の闇の、なんともいえない茫漠とした絵肌の表情は、東洋の画材ならではの。だからこそ、吸い込まれそうな深みが表現できているのではないか。

しかし、この作品が革新的かと問われれば、ためらわざるをえない。そもそも革新的な作品の出品は、全体的に少なかったようだ。審査員の一人、山下裕二明治学院大学教授はプレス説明会の席上で、「もっと型破りなものが出て

くるといいなと思っていたが、わりとオーソドックスなものが集まった」と話している。

この賞は評論家などによる推薦方式ではなく、公募で出品作を集めている。今回の応募総数は259点。公募なら多様な作品が集まりそうなものだが、意外とそうでもなかったことになる。山下氏のように現代美術に明るい審査員もいるので、少々もったいないことのように思う。

そんな中で、プレス関係者の注目を大いに集めた作品があった。「審査員奨励賞」を受賞した外山諒(とやま・まこと)の《Living Pillar》だ。縦長の作品のほぼ全面に木目が描かれ、数匹の蛾(が)が留まっている。逼真性が高く、暗がりの中で光が当たっているような表現も効果的。本物に似せただまし絵のようですらある。

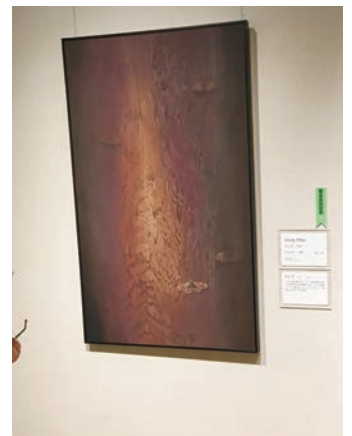
リアリズムや構図といった理論系の言葉でも、この作品の解説はできそうだ。ただ、なぜかそうすることに抵抗を感じる。美しい漆器、スマートフォンの裏面の金属

板など、誰も物の肌合いに無性に惹きつけられることがあるだろう。あるいは動物好きの人なら犬や猫の毛並みを想像してもいいかもしれない。この作品にはそれらに通じるような魅力があるのだ。視覚を通じて触覚に強く訴えかける。だから理屈を遠ざけるのではないだろうか。制作の動機について外山は、「法隆寺の柱に感動して描いた」と話す。素直に納得させられる言葉である。

ところで、外山が受賞した「審査員奨励賞」は、もともと予定にはなかったという。審査終了後、場所を変えての雑談の中ですべての審査員の口から気になる作品として名前が出てきて、予定していなかった賞をわざわざ設けたというのだ。なぜこの作品が最初から賞に選ばれなかったのか、といったところにも、明治以来の制度の上に成立した「日本画」というジャンルの今後の展開の鍵はありそうだ。賞においては丁寧で真摯な姿勢による審査が必須であることは言うまでもない。だが、ふっと力

を抜いたときに見えてきたり表現できたりするものがあるのは、どんな仕事にもあることなのかもしれない。

取材・文・撮影・レイアウト
=小川敦生



審査員奨励賞を受賞した外山諒《Living Pillar》展示風景

Whoops! 見聞記

輪郭線を描かなかった伊藤若冲の巧みを知る

この春、東京都美術館で『生誕 300 年記念 若冲展』が開催された。江戸時代の画家、伊藤若冲の代表作を集めたこの展覧会には、会期中に 44 万人もの人が訪れたという。極彩色が艶やかな《動植綵絵》などの作品を楽しむうちに、どうしても気になる特徴が脳裏から離れなくなった。展示作品の中に、輪郭線がない絵があったことだ。その理由に思いを巡らせた。



「生誕 300 年記念 若冲展」が開催されている東京都美術館入り口

東京・上野の東京都美術館で開かれている「生誕 300 年記念 若冲展」を訪れた。1716 年生まれの江戸時代の画家、伊藤若冲の生誕 300 年を記念した展覧会だ。明治時代に京都の相国寺から皇室に献納されて以来、東京で開かれた展覧会では初めて一堂に会したという《釈迦三尊像》3 幅《動植綵絵》30 幅を中心に、約 90 点が展示されていた。

この展覧会では、全体を通して特に印象深く感じたことがあった。輪郭線がない絵がたくさんあったことだ。同じ時代の浮世絵

などは線で表現するのが普通なのに、なぜなのか。疑問を解くために、会場の流れに身を任せて歩を進めながら、可能な範囲で作品をじっくり観察することにした。

まず向き合ったのが、京都・鹿苑寺所蔵の《鹿苑寺大書院障壁画 葡萄小禽図襖絵》。4 枚の襖の画面に、つるを妙な形にくるくると伸ばした葡萄の木が造形意欲たっぷりに描かれている。

細かく観察すると、ところどころに斑点のついた葉が、葉脈まで丁寧に描かれている。ただし、輪郭線は全く見られない。ぶら下

がっている葡萄の実もそうだ。しかし輪郭がなくとも、葉の一枚一枚や実の一粒一粒を見分けることができる。さらには、墨の濃淡によって実が飛び出して見えたり、葉や葉脈が浮き出て見えたりする。ここで推論したのは、「輪郭を描かないことによって、絵画をより立体的に見せようとしたのではないか」ということだった。

次の展示室にあった岡田美術館（神奈川県箱根町）所蔵の《雪中雄鶏図》は、雪が降り積もった草地の上で一羽の鶏が片足を大きく上げ、黒い尾羽を翻らせるようにして立っている絵だった。雪や笹の葉など一部の描写を除くと、輪郭線が見当たらないように見え

た。しかし、展示ガラスにぎりぎりまで顔を近づけて見ると、赤いトサカや白い羽の外側の線が少し濃い。輪郭線の役割を果たしているようにも見える。階上の展示室の《動植綵絵》でも、ほとんど輪郭線は見当たらないように見える一方で、植物の茎などをよく観察すると端が濃く描かれている。花びらの背後を影にすることで、形を鮮明にしたような表現もある。形を浮き立たせる技に、若冲はとにかく長けている。

思えば、絵画の中で色や形を区別する輪郭線は、実際の空間では色と色、形と形が隣り合ったときにできる概念的な存在だ。若冲はそんなことを直感的に理解し、実際の物においては存在しない輪郭を、線のあるなしにかかわらず、巧みに表現しているように思えた。

東洋絵画について調べてみると、「没骨（もっこつ）」という筆線できくった輪郭を用いずに、モチーフの形態を直接に彩色または水墨で描く手法で描かれることがあることも分かった。「宋の徽宗皇帝が描いたとされる《桃鳩図》などが代表的な例だ。若冲が没骨の名手であることを、この展覧会では目のあたりにすることができた。一方では、滋賀県の MIHO MUSEUM 所蔵の《達磨図》や岡田美術館所蔵の《三十六歌仙図屏風》など、線描の妙にうなるような作品も展示されていた。東洋画の神髄を極めた若冲の画力に脱帽する展覧会だった。

取材・文・撮影・レイアウト
= 椋田大揮



『生誕 300 年記念 若冲展』（終了しました）
2016 年 4 月 26 日～5 月 24 日、東京都美術館

伊藤若冲作《百犬図》の一部を編集部で模写したもの。左は輪郭線を描き、右は輪郭線を描かずにそのまま模写している



パリのサンジェルマン・デ・プレの近くにある歌手、セルジュ・ゲンズブル（故人）の元住居。ファンの聖地という

街角アーツクランブル [欧州篇]

欧州の街はアートの泉。猫も歩けばアートに当たる。美術館や教会に入らずとも、街を歩いていけば、さまざまな「表現」に巡り合う。このコラムでは、パリを中心に今年訪れた欧州で遭遇したアート入り風景の一部をお見せしたい。

取材・文・撮影・レイアウト=小川敦生



パリのモンマルトルのカフェに、ロートレックの油彩画がかかっていた。店員は「フェイクだ」という。それにしてはできがいい絵だった



南仏ニースの海岸風景。まるでクリストのプロジェクトが始まるのかと思われるかのように、傘が林立している



ベルリンの壁の一部。まるでiPhoneが飛んできて地面に刺さっているかのように立っていた



欧州ではグラフィティは珍しくないが、ワンパターンのものが多く、意外とクリエイティブではない。たまにこんな力作も。パリの街角から

今年がダダイズムが始まって100年の節目の年。発祥の場所というチューリヒのキャバレー・ヴォルテールを訪ねると、壁が「ダダ」だった



街角で絵を売っているのは、パリ・モンマルトルの日常風景。猫の絵は欧州でも人気のようだ。この店の近くには、猫の絵専門のギャラリーもあった

Whoops! アーカイヴ

個性豊かな雛人形が東北地方から勢揃い

目黒雅叙園（東京都目黒区）で1月に開かれた展覧会「百段雛まつり みちのく雛紀行」。展示されていたのは東北各地の雛人形。同じ雛人形でも、地域によって表情も大きさも違う。



「盛岡町家旧暦の雛祭り」のつるし飾り



入り口に展示された「原孝州」の雛人形

目黒雅叙園を訪れたのは、身を刺すような寒さが和らぎ、紅や白、桃色などの点が木々の間から恥ずかしそうに見え隠れするようになった3月だった。敷地に入ると、灰色や黒、茶色の人の波に混じって輝くような紅色の振袖を着た女の子たちをよく見かけた。慌てる母親の手を引っ張りつつ喜び勇んで歩く女の子の後ろ姿を見て、「ああ、そうか、雛祭りの季節だったのだな」と思いいたった。彼女らの行く先は、料亭や総合結婚式場として88年の歴史を持つ目黒雅叙園の中でも古式ゆかしき風格が漂う「百段階段」。ここで、「百段雛まつり みちのく雛紀行」と題した展覧会が開かれていたのだ。「百段階段」は、東京都指定有形文化財として登録されている歴史的建築物だ。

目黒雅叙園は、美術関係者の間では、多くの近代日本画による室内装飾でも知られている。そんな建物の中にどのように雛人形が飾られているのか。想像するだけでわくわくする。まずは本館のエントランスに一飾り。「百段階段」内の7つの部屋に、およそ500点の人形が展示されている。すべて、東北地方から集めたものという。

エントランスに展示されていたつるし飾りは、岩手県盛岡市鉾屋町と大慈寺町界隈で飾られる「盛岡町家 旧曆の雛祭り」のつるし飾り。「ピビビ手芸教室」という地元の団体が制作したものだった。入り口に入って正面に見える、

10畳ほどの畳が敷かれた台の上に展示されていた。人形の頭は同じ丸みを持ちながらも個性的。一つ一つ違う表情をした大福餅のようだ。黄色やだいたい色、茶色や紅色の生地を組み合わせた衣装をまとい、手にはそれぞれの役目を表す笛や太鼓を持っている。おか持ちや牛車は手のひらに載る程度の大きさ。所狭しと座り、格子状の天井にぶら下がる生地で作られた藤棚とともに来場者を出迎えていた。

展示されている雛人形の近くの券売機で当日券を購入し、エレベーターで会場へ。エレベーター内の係員の説明によると「百段階段」自体が指定文化財のため土足厳禁で展示品保護のため撮影も禁止しているとのこと。スリッパに履き替えて会場に入ると、番号が振られた99段の階段が下から見上げられた。この階段の道中に「十畝の間」「漁樵の間」「草丘の間」「静水の間」「星光の間」「清方の間」「頂上の間」の七つの部屋が設けられ、各部屋に雛人形が展示されていた。

特に印象に残ったうちの一つ、「草丘の間」ではお内裏様やお雛様の代わりに畳や掛け軸まで精巧に作られた小さな屋敷の模型が飾られていた。ここで飾られていたのは、岩手県盛岡市に伝わる「長岡家所蔵の雛人形」をはじめとする3飾りの雛人形。ほかに、長い糸に着物の生地で作られたフクロウやセミ、赤ん坊が縦に吊るさ

れているものがあつた。会場のスタッフに聞いてみたところ、東北地方や全国各地に伝わる雛祭りの飾り物で、「つるし飾り」という言葉で説明された。子供の健やかな成長を願う農民たちが着物の裾で作ったものだという。さらに、フクロウは「不苦労」と当て字ができ「苦労をしないように」、セミは地中に潜って長生きすることから「長寿」、赤ん坊は「赤ん坊が元気に育つように」という願いを込めて作られたのもであると話してくれた。

「静水の間」には宮城県白石市の片倉家十四代当主が収集した指先ほどの雛人形「芥子雛」や頭部に豆が使われた人形「豆人形」が展示されていた。この芥子雛や豆人形はよく見ると一つ一つの表情が微妙に違い、衣装も色分けされている。思わず作った人間の作業の様子が目に浮かんだ。

星光の間には宮城県の上野原市で作られる三春張子という張子細工の雛人形と岩手県奥州市で行われる「奥州水沢くくり雛まつり」の雛人形があつた。三春張子の雛人形は、中央の段に二頭身にデフォルメされた七福神が。可愛らしい中に七福神の力強さや優しい

表情が表現されていた。「奥州水沢くくり雛まつり」の雛人形は綿を布で包んだ「くくり雛」と呼ばれ、雛人形のほかに福助や桃太郎、小野小町など、日本ではよく知られた人物やキャラクターが所狭しと並んでいた。人形自体も前や斜めから見ても人形の見え方が変わらないようになっており、浮世絵の人物が現実に飛び出したように思えた。

同じ3月3日に目にする雛人形も、地域や社会環境の違い、収集した人間によって意味合いや造形が大きく異なってくるのだ。普段からよく耳にし、また知っているつもりのもので、こうした展示によって鑑賞者はさまざまな発見をすることができる。展覧会というものの意義深さを改めて知った。

取材・文・写真・レイアウト
= 椋田大揮

「百段雛まつり みちのく雛紀行」展(終了しました)
2016年1月22日～3月6日、目黒雅叙園(〒153-0064 東京都目黒区下目黒1-8-1)
東京都指定有形文化財「百段階段」

Whooops! 考

エジプト人にとって文字は新しいメディアだった

東京・豊島区の古代オリエント博物館でこの春開催された「世界の文字の物語－ユーラシア文字のかたち－」展（7月から大阪に巡回）に出かけた。楔形文字や甲骨文字から日本のひらがなまで、古代から使われてきた文字にまつわる文物が多数展示されていた。中でも目を引いたのが、エジプト発祥の「ヒエログリフ」。何せ象形文字だから絵に近く、見ているだけで楽しい。エジプト人にとって文字とは何だったのか。展示室を歩きながら考えた。



会場入り口に展示された《ハンムラビ法典碑（複製）》と展示風景



《ナルメル王のパレット（複製）》とその解説

東京・豊島区の古代オリエント博物館を訪れたのは5月下旬。「世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち—」という展覧会を見るためだ。紀元前3000年頃にメソポタミアで使われていた「原楔形文字」、古代エジプトの象形文字「ヒエログリフ」、東アジアで発達して漢字の原型となった「甲骨文字」、そして現在日本で使われている「ひらがな」…。会場ではユーラシア大陸とその周辺で生まれた実に多種多様な文字が書かれた紙や石柱などの文物が展示されていた。展示物の総数は165点ほどに及んだ。

墨跡や本など、文字が書かれた史料が出品される展覧会は多々あるが、全体で文字の歴史をテ-

マにするのは意外と珍しい。企画した古代オリエント博物館研究員の下釜和也さんに理由を尋ねると、「文字も人類が作り出したものだから」という。日々使っているので、ありがたみを感じるのを忘れていたが、文字は最高の知の結晶ともいえる記号である。どんなコンピュータープログラムも、文字にはかなわないような気がする。

下釜さん自身、大学時代に趣味としてたくさんの語学の習得に励む中で文字についても広く深く学ぶようになったという。博物館に勤務する現在の研究対象は、中近東の先史時代の考古学。興味深いのは、それが文字を必要としなかった時代だったことだ。そこで

「なぜ人類にとって文字が必要なのか」という疑問を持ったのは、下釜さんならではの視点といえそうだ。それがこの展覧会にも大いに生きているわけである。

展示物の中で特に印象深かったのは、エジプト人が使っていた象形文字「ヒエログリフ」。ほぼ同じ時期にメソポタミア人が使用していた「楔形文字」が似た形の部首を組み合わせでさまざまな文字を表したのに対し、ヒエログリフは開いた葦や鳥、エジプト神や籠などを表したさまざまな種類の「絵」を用いて構成している。絵であることは分かるので何かの情景を表しているようにも見えるが、語られている内容を解読のための知識なしに読み取るのは難しい。とにかく観察を続けることにした。

少し歩いて、紀元前3100年頃の遺物《ナルメル王のパレット（複製）》に魅入られた。黒に近い灰色の逆三角形に加工された石に、エジプト王ナルメルが敵を武力で制圧していく場面が浮き彫りにして表されている。しかし、そこに描かれているのは絵であることが一目でわかる。むしろ、どこにヒエログリフ=文字があるのかわからないのだ。

パネルの解説を読むと、逆三角形の最上部両端に角の生えた牛の頭が2つ正面から描かれ、その間にナマズをかたどった「ナル」、道具のノミをかたどった「メル」という文字が書かれているとある。目を作品に戻して探してみた。確かに最上部両端に牛の頭が2つ描かれ、挟み込まれるようにしてひげのような線が引かれ、尾ひれと背びれが付き、目が2つある細長い魚のようななにかと、先端に細い長方形がついた持ち手のようななにかが配されている。確かにナマズだった。しかし、ナルメルの戦いにナマズが出てきたわけではなさそうなことは想像できなかったが、このナマズがヒエログリフだったのかと妙に納得した。そして、古代エジプト人にもナマズが身近なものだったことに共感する一方で、文字にも絵の美しさを残した彼らのセンスに感心した。

次に観察したのは、平山郁夫シルクロード美術館所蔵の《タネフェルトの『死者の書』断片》(紀元前332-前30年頃)である。細長い長方形が上下にあり、上部の

長方形の中には何かの動作をしている複数の人物が描かれ、下部のそれには縦線が等間隔に引かれた中にヒエログリフがびっしりと書かれている。このヒエログリフは、死者を蘇らせる呪文だという。しかし丁寧に観察すると、目や鳥など、ほとんど絵にしか見えないものが混じっていた。後日、ステファヌ・ロッシニ著矢島文夫訳『図説 エジプト文字入門』を参照すると、ヒエログリフには発音を表す文字とともに、より絵に近い絵文字も表していることが分かった。例えば「miw(猫)」という単語を表すときはミルク瓶、小鳥、猫の順に左から書かれるが、ミルク瓶はmi(メイ)、小鳥はw(ウ)という音を表し、発音の仕方を表す。そしてその意味を補足するため猫の絵文字を描きこの文字が「メイウ(猫)」を表すことを示すのだ。

現在と違って古代エジプトの時代には文字は読めない人も多かったはず。はたしてどんな役割をはたしていたのだろうか。下釜さんに尋ねると、丁寧に答えてくれた。

「エジプト人は頁岩という石に先史時代から模様をつけていた。だが、《ナルメル王のパレット》ができた時代、文字はエジプト人にとって新しいメディアであり、ほとんど読める人がいなかった。にもかかわらず文字を彫ったのは、エジプト人の王が一種のシンボルとして、文字を書き記すことで自分の権威を誇示したのではないか」

なるほど、権威の象徴であるピラミッドのような役割を文字がはたしていたのか。文字というもののありがたみがまた増した気がした。

この展覧会に向けて調査や研究を進めた中では発見もあったという。貴族などが亡くなった折りに書かれた《死者の書》にはお経のような文章が記されており、記述する専門の職人がいたという。そして、「記述する際に、前の《死者の書》に書かれたものを職人がそのまま流用していたこと」がわかったのだ。古代の文字には意味を伝えるだけでなく、権威や折りを宿らせるような役割もあったのかもしれない。

取材・文・撮影・レイアウト
= 棕田大揮



ヒッタイト文字、楔形文字、ヒエログリフで書いた筆者の名前。半券と共に渡された3枚の紙にスタンプで記すことができた

『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち—』

【東京展】(終了しました)

2016年4月9日~6月5日、古代オリエント博物館(東京都豊島区)

【大阪展】

2016年7月9日~9月4日、大阪府立弥生文化博物館(大阪府和泉市)

●あっ！の展覧会●

その男、凶悪につき

東京・銀座のヴァニラ画廊でシリアルキラー展が6月に開かれた。歴史的な凶悪犯罪者である彼らが残した品々から、いったい何を感じ取ることができるだろうか。

「シリアルキラー」とは殺人鬼のこと。同じ人間だとは分かっているけど、絵画を描くことについて違和感を覚えてしまう彼らの作品を純粋な気持ちで鑑賞するのは、実はとても難しい。6月にヴァニラ画廊で開催された『シリアルキラー展』には、彼らが描いた作品、手紙やセルフポートレート、身につけていた衣類や小物など、実に様々な種類の資料が展示された。個性的なドクロや斬首した人間の頭部をつかんだような内容が描かれている一方で、裸体の男女の肖像画やディズニーのキャラクターのようなモチーフの素描画などちょっと見には犯罪や狂気を感じさせない絵がかけられており、その表現の多様さには目を見張らざるをえなかった。

非現実的な事件は、いつの時代も人々の関心事である。とりわけシリアルキラーに関するニュースはひととき異彩を放つすごみがある。“事実は小説よりも奇なり”という言葉があるが、彼らの人生

もまた、時にファンタジーを超えるような壮絶なものだった。小説は人の想像力によって書かれる。同じように、彼らも想像力の単なる実行者にすぎなかったのではないかな。実際、映画『羊たちの沈黙』のバッファロー・ビルや、映画『IT』のベニーワイズなど、実在するシリアルキラーの人物像や行動にインスピレーションを受けたとされるキャラクターは数知れない。

さて、順路に従い展示室に入ろうとしてすぐ左手を見ると、あいさつ代わりにと言わんばかりに楽しそうに微笑むピエロの絵が迎えてくれた。33人もの男性を殺害したというジョン・ウェイン・ゲイシーの描いたものだ。彼なくしてはシリアルキラーの絵画は語れないと言えるほど有名な人物である。この絵を見た瞬間、「もう引き返せないな」と感じた。

画集などで知っていた有名な絵画に美術館で実際に接したとき、風格に驚くことがある。ゲイシー

の作品は、段違いだった。以前、インターネットなどでシリアルキラーの絵を見たことがあった。その時との感動のギャップがあまりに大きいのだ。しかも、その感動は明らかにネガティブな方向へと向かう。以前、画廊のスタッフから「負のパワーがすごい」と聞いていたが、まさにその通りだった。絵を見て心の底から恐ろしいと思ったのは初めてだ。とはいっても彼らは画家ではなくシリアルキラーである。いや、シリアルキラーだったからこそ、ここまで心を揺さぶられたのだろう。しかし、そこがまさに彼らの作品の難しいところでもあるのだ。

本来、純粋に作品を鑑賞しようとする時に、作家が込めた想いを読み解こうとする努力はしても、実際にその作家の人物像を作品に投影して見るべきではない。先入観が見方をゆがめることがあるからだ。だが、もしその作家がシリアルキラーだったらどうだろうか。もはやその作品は、作家の人

物像とは分けることができないほど汚染、されてしまう。鑑賞者が心掛けるべきなのは、作品から、あふれ出てくるかに見える狂気に圧倒されないようにすることだ。確かに、彼らの作品を含めた資料を見れば見るほど、リアリティや生々しさから、彼らと直接つながるような感じがしてゾッとするだろう。しかし、だからこそ、そこに感じられる特殊なパワーにひるむことなく、観察し続けるべきなのだ。

殺人という経験が彼らの創造性を引き出した可能性はあるだろう。しかし、もしかしたらそこに、中学生のノートの落書きのような、普遍的な価値を見出せるかもしれない。大切なのは、やはり、常に冷静な目でそこにある物を探ってみることだ。



ジョン・ウェイン・ゲイシー



オーティス・トゥール

取材・文・レイアウト＝槇山亮
写真提供＝ヴァニラ画廊
全てHNコレクションより



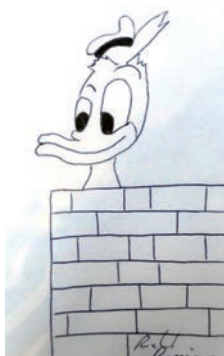
ジョン・ウェイン・ゲイシー



オーティス・トゥール

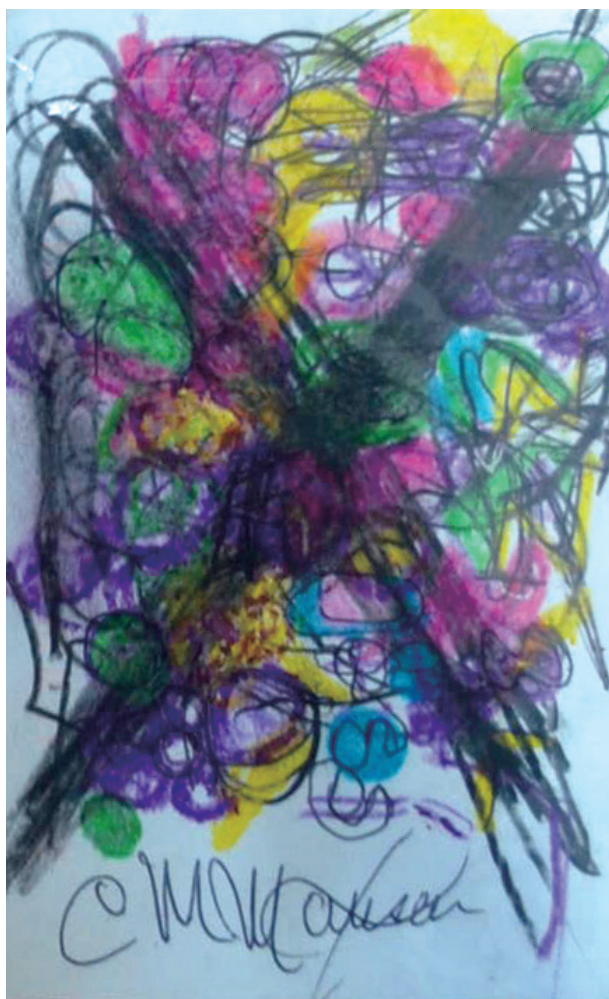


ヘンリー・リー・ルucas

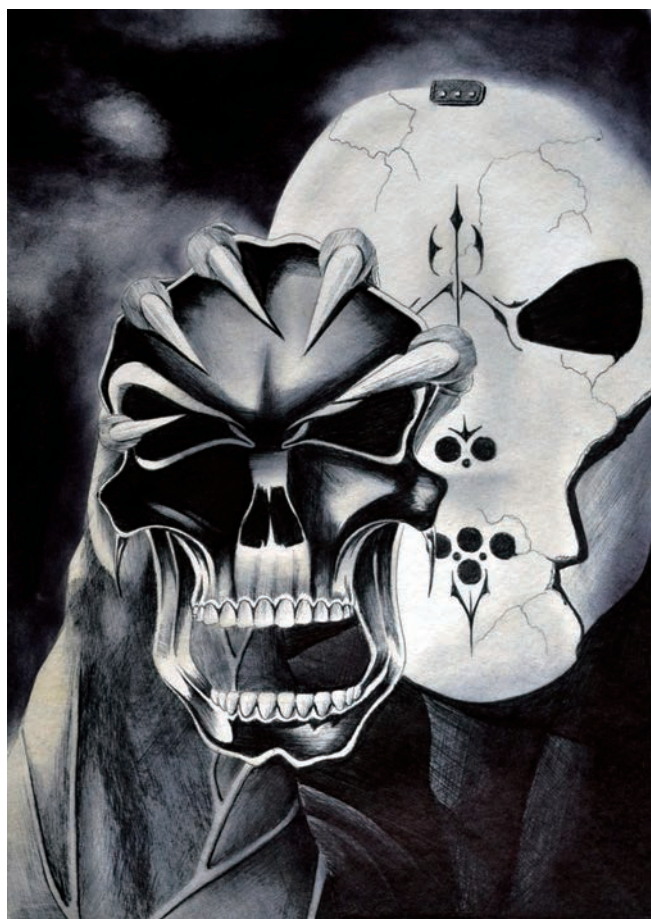


リチャード・ラミレス

『特別展示 HN コレクション
シリアルキラー展』(終了しました)
2016年6月9日~7月10日
ヴァニラ画廊
〒104-0061
東京都中央区銀座8丁目10番7号
東成ビル地下2F

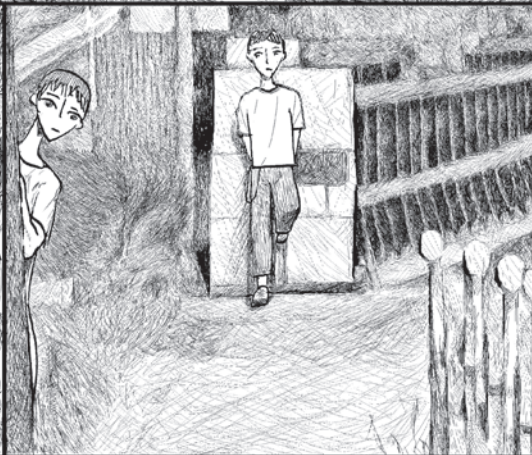
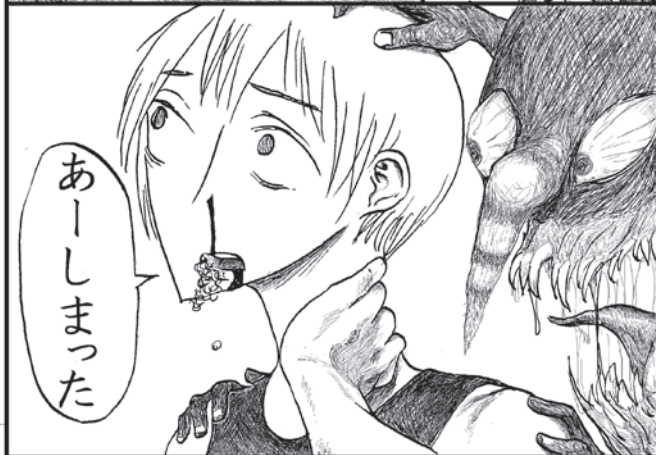
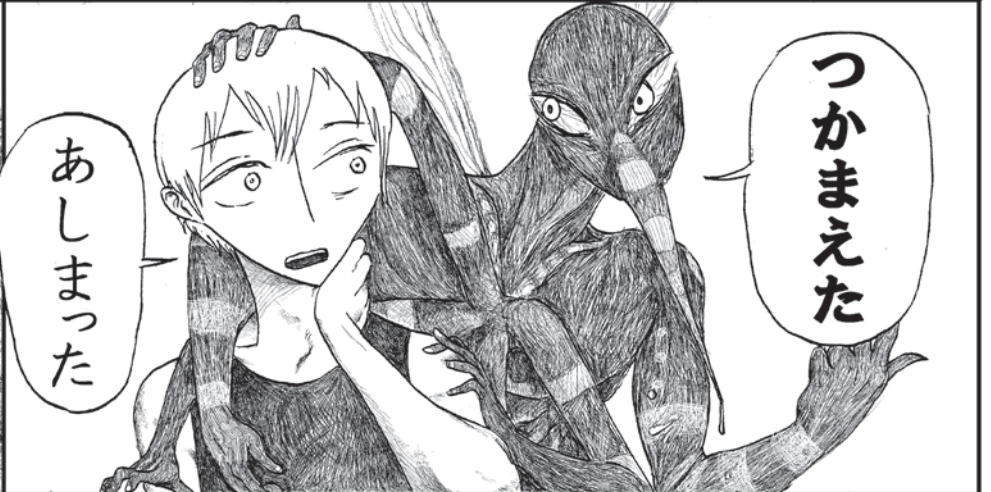
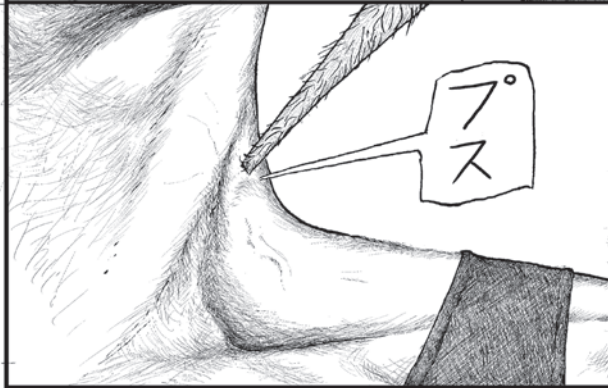
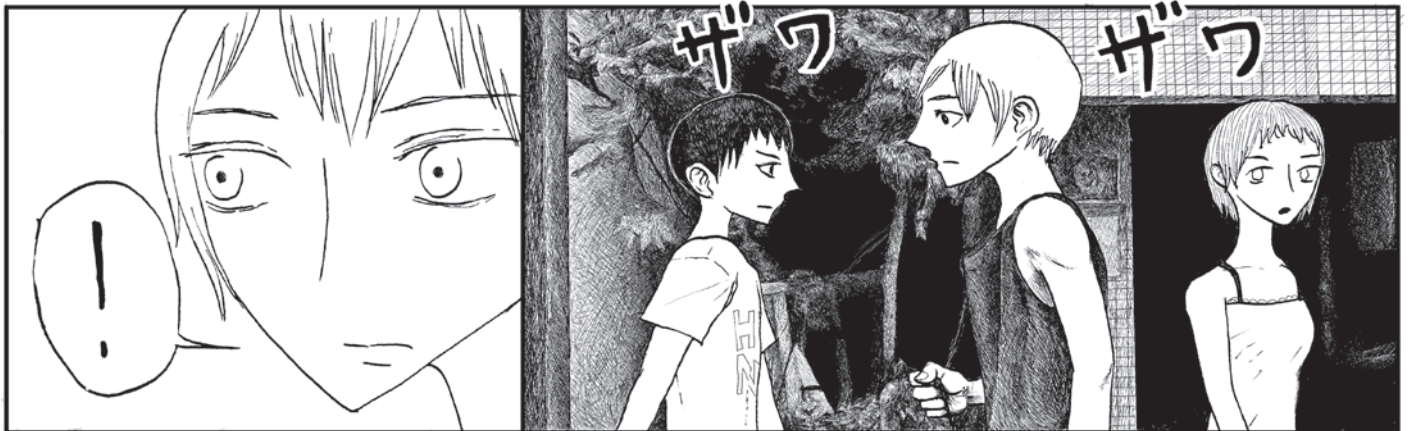


チャールズ・マンソン



ゲイリー・レイ・ポールズ

面白まんが「天敵」



額縁・画材・デザイン用品

実施中の
お知らせ!!

多摩美術大学生支援セール

学校まで直接配達だから便利!!

詳しくは校内設置、
又は配布しております
チラシをご覧ください。

- 張りキャンパスが安い!
- 木枠、木製パネルが安い!
- カットキャンパス、
ロールキャンパスが安い!
- 油絵具、画溶液が安い!

***** 安い価格のほんの一例 *****

世界堂製張りキャンパス (カルワク) F100	大特価 ¥11,300 (税込)
世界堂製木枠 (杉材) F100	大特価 ¥9,900 (税込)
木製パネル F100	大特価 ¥9,000 (税込)
カットキャンパス 麻100% (中目) F80	大特価 ¥4,000 (税込)
カットキャンパス 麻100% (中目) F100	大特価 ¥4,800 (税込)
世界堂製画溶液ペインティングオイル 1,000ml	40%OFF ¥2,650 (税込)
世界堂製画溶液テレピン 1,800ml	40%OFF ¥4,700 (税込)
世界堂製ブラシクリーナー 2,000ml	40%OFF ¥1,400 (税込)
世界堂ロールキャンパス C&TC 中目 1.4x10m	大特価 ¥12,700 (税込)
ホルベインアクリラジェッソ 900ml 詰め替え	大特価 ¥1,600 (税込)

ご注文、問合せは (株)世界堂 多摩美術大学生支援セール係
 電話で FAXで E-mailで
 E-mail gaisho@sekaido.co.jp FAX.03-5360-4010 TEL.090-3716-4575

豊富な品揃えと満足プライス日本最大級専門店チェーン

新宿本店 TEL.03-5379-1111 〒160-0022 東京都新宿区新宿3-1-1 (営業時間9:30~21:00まで)

池袋バルコ店 (池袋バルコ 6F)	☎03-3989-1515	相模大野店 (相模大野モアーズ4F)	☎042-740-2222
立川北口店 (クリサス立川5F)	☎042-519-3366	ルミネ横浜店 (ルミネ横浜 8F)	☎045-444-2266
アートマン店 (京王アートマンA館3F)	☎042-337-2583	ルミネ藤沢店 (ルミネ藤沢 4F)	☎0466-29-9811
町田店 (町田市原町田4-2-1)	☎042-710-5252	新所沢バルコ店 (新所沢バルコLes館3F)	☎04-2903-6161
		名古屋バルコ店 (名古屋バルコ東館5F)	☎052-251-0404



インターネットでお買い物 <http://webshop.sekaido.co.jp/> 情報満載!世界堂のホームページ <http://www.sekaido.co.jp/>
 SEKAIDO ON-LINE SHOP 世界堂オンラインショップ 検索 世界堂

TAMA
ART
UNIVERSITY
ART
SCIENCE

芸術を「考える」「実践する」。

机の上だけに留まらない
日々の学びから
「理論」をつかむ。



多摩美術大学芸術学科
 八王子キャンパス
 URL: <http://www.tamabi.ac.jp>

芸術学科に関するお問い合わせ▼
 TEL: 042-679-5627 FAX: 042-679-5649
 E-mail: geigaku@tamabi.ac.jp

世界的哲学者の、息づかいが聞こえる。



鈴木大拙
没後五十年記念

大拙と松ヶ岡文庫展

Memorial Exhibition
for 50th Anniversary of
the death of
Dr. Daisetz Suzuki
**Daisetz
and
Matsugaoka Bunko**

多摩美術大学美術館

2016年7月2日(土) → 9月11日(日)